

所属・資格 哲学科・准教授

申請者氏名 三平 正明

研究課題		相対主義的意味論
報告の概要	研究目的 および 研究概要	フレーゲやデイヴィッドソン以来、文の意味とはそれが真となる条件のことであり、したがって文の意味を知るとは、その真理条件を知ることだと考えられてきた。このような真理条件的意味論は、現代言語哲学や意味論の主流をなす見方であるが、しかしそれは、主観性を含む文脈には適用しにくい。なぜなら、嗜好や価値を表現する文は、有意味ではあるが、(客観的に) 真であるとも偽であるとも言えないように思われるからである。そこで、こうした主観的文脈に対しても真理条件的意味論を適用できるかどうかを考察することが、研究目的である。
	研究の結果	1. 嗜好や価値を表現する文について、その主観性を踏まえながら意味論を構築しようとするアプローチには、いくつかの種類がある。それは、表出主義や文脈主義、相対主義などである。これらのアプローチの長短を本格的に考察することはまだできていないが、そのうちで相対主義が一番有望ではないかという予想のもとに、相対主義的な真理条件的意味論の枠組を構築した。 2. 相対主義的な意味論を採用すると、同じ一つの発話(あるいは文脈における文)がある基準によっては真、別の基準によっては偽だと判定されることになる。これは、哲学の伝統的な考え方(同一の発話は真であれば真のままであり、偽であれば偽のままであって、真から偽に変わったりしない)と衝突する。そのため、相対主義的意味論は、そもそも「何かを主張する」というわれわれの行為の意義を再検討させるものであることが明らかとなった。
	研究の考察・反省	1. 主観的文脈に対する意味論のアプローチでは、相対主義が有力だという予想のもとで研究を進めているが、まだ他のアプローチの考察が十分にできていない。客観主義、表出主義、文脈主義などの見込みも本格的に検討しなければならない。特に、表出主義の近年の研究は著しく発展を遂げているので、そうした進展も追っていく必要がある。 2. 前記「研究の結果」の2で触れた問題は、フレーゲやエヴァンズの問題とも言われているが、その問題が主張という行為の意義にまで関わってくるのが明らかになった。この点は、研究範囲が広がるとともに考察が深まって良かったと考える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>本年度の前半は、前年度の個人研究費による研究成果を「相対主義の自己論駁性」という論文としてまとめようとしたが、途中で構想が行き詰ったために断念した。後半から、発話の相対的な評価の問題を「相対的な正しさ」として論文にまとめようとしている。来年度にはそれをぜひ公刊したいと考える。</p>	